



アイヌ語で「広場」の意味
文 北原 次郎太 監 小笠原 小夜



道内には、アイヌ語が基になった地名がたくさんあるよ。いくつ読めるかな。
①網走市豊郷・勇仁川
②宗谷管内中頓別町松音知
③宗谷管内中頓別町敏音知

＝答えは紙面の下に

読んでみよう

アイヌ語には日本語にない音があります。これをカタカナで書くときには字を小さくして表します。このページのタイトル「ミンタラ」の「ラ」もそうですね。小文字は全部で14種あります。毎回、そのいくつかの読み方をしょうかいします。

今回は「シ」です。例えば「ウバシ」（雪）、「チシボ」（針入れ）、「アットウシ」（樹皮の着物）という単語などに使われます。

「シ」は「シ」と「ス」の間のような音で、話し手によってどちらかの音に近く聞こえます。後の母音をはっきり言わないように気をつけましょう。

「チシボ」のように、イ段の音の後では「シ」に近く聞こえます。

「シ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学文学部教授の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人はQRコードから読みこんでください。



クイズの答え

- ①チカチカ(チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ)
- ②チカチカ(チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ)
- ③チカチカ(チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ)
- ④チカチカ(チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ)
- ⑤チカチカ(チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ) (チカチカ)

失われた物語 シンリッオルツペ

監修 佐々木 利和

トンコリをひき多くの曲残す

北海道の北に、南北に長くのびる樺太(サハリン)はアイヌ民族やウイラタ民族、ニブフ民族が暮らしてきた島です。中央には山脈があり、その西側と東側で、いくつものアイヌ民族のコタン(村)がつけられてきました。

西平ウメは、樺太の東海岸オタサン(小田寒、フィルボ)村で1901年に生まれ、豊かな自然の中で元気に育ちました。ウメが幼いころ、それまでロシアの領土だった樺太が日本領になり、近所に三味線が上手な和人が移り住んできました。ウメもそれをまねて、三味線をひきました。音楽が好きなのだと気づいたウメの祖母は、トンコリ(五弦琴)の教育を始めます。祖母が見こんだ通りウメはトンコリがとてうまくなりました。やがて日本が戦争に負けると、樺太は再びソビエト連邦(ロシア)の領土になりました。ウメの一家をはじめ、樺太アイヌの多くは、このときに北海道に移住する決意をします。

樺太へ出かけに行っていた日本人は親戚をたよって帰りますが、樺太アイヌには頼る人がいません。ウメの一家はオホーツク管内興部町に移り住み、工場で働いたり、造材や漁業などの仕事についてたりして暮らしました。

トンコリのひき手が北海道に移り住んだことが伝わると、「せむトンコリをひきにきてほしい」と呼ばれるようになり、1958年に、旭川市のアイヌ民族有志が層雲峡でイヨマンテの儀式をし、ウメは招かれてトンコリをひきました。胆振管内白老町のアイヌ民族博物館にも招かれ、樺太アイヌの文化やトンコリを教えました。

アイヌ文化や音楽を調べる和人の研究者も、たくさん訪ねてきました。ウメは裁縫もつまく、やわわしいぼうし、くつなどを作りました。

こうして77年経つまで、およそ70年間トンコリをひき続け、多くの人にアイヌ民族の音楽を伝えました。今では北海道だけではなく、全国にトンコリを楽しむ人が大勢います。それらの曲の多くは、ウメが残したものです。(敬称略)

西平 ウメ (1901~77年)



権太式の家

1913年、大阪の博覧会に参加した

1958年、層雲峡でのイヨマンテ。ウメの一番古い録音は、このとき尾澤カンシャク・杉村満親子によって残された

研究者に多くのことを教えたウメ。小泉文雄が録音した歌やトンコリの音は、インターネットで聞くこともできる

冬用ぼうしも作った

江戸時代までの樺太には、およそ南半分がアイヌ民族が暮らし、北側にはウイラタ民族やニブフ民族が暮らしていました。

明治時代になると、日本とロシアの間で、樺太と千島を交換する条約が結ばれました。このときから北海道・千島と樺太のアイヌ民族は二つの国に分かれてしまいました。

日露戦争後の1905年、樺太南部は日本領になりました。人々はいくつかの村に集められ、子どもたちは日本の教育をされることになりました。

その40年後、日本の敗戦によって、もう一度国境が変わるのです。このとき樺太・千島にいたアイヌ民族のほとんどが日本に移り住みましたが、現在でも一部の人がロシア国内に暮らし、団体も作っています。

国境 何度変わった樺太

江戸時代までの樺太には、およそ南半分がアイヌ民族が暮らし、北側にはウイラタ民族やニブフ民族が暮らしていました。

北海道とは少し自然環境がちがう上、北方の民族とよく接していることもあり、北海道とは少し雰囲気がちがうアイヌ文化ができました。

例えば衣服の文様やその材料に魚の皮をよく使うこと、犬ぞりを使うこと、夏用と冬用の家があることなどです。

西平ウメがひいたトンコリは、北海道のオホーツク海沿岸から樺太で盛んだった楽器です。

樺太には、ほかにもいくつかの民族が働きにきたり、日本や清(中国の古い国)の役人が来たり、漁場をつくることも